「医療否定本」に殺されないための48の真実を読んで

私はこの度、「医療否定本」に殺されないための48の真実を読ませて頂き、印象に残った点が三つあります。

一つ目は、医療否定本の持つ影響力。

二つ目は、平穏死という考え方。

三つ目は、患者の医療への知識の欠如です。

まず最初に、本のタイトルのも入っている、医療否定本の恐ろしさをすごく感じました。極論を述べ、患者の不安を煽り、間違った対応に陥れるようなこれらの本は、一体何のために出版されるのだろうと思うほどでした。病気になり、患者が不安になった後、何かに頼りたく本を探し読み始めるというケースも多いと思います。そして、今の治療方法に疑問を持ち、誤った判断をしてしまうというのは大変不幸なことであります。

次に平穏死の考え方についてです。私は現在27歳であり、死について真剣に考えたことがありませんでした。しかし、全ての人々は生まれながらにして、死と向き合う宿命を持つということは事実でございます。当たり前のことでありながらも、今の自分には関係ないという思い込みでこれまで過ごしてきました。

しかしながら、必ず訪れる死に対し、どう接していくのかは、この平穏死という考え方がとても重要だと思いました。私個人だけでなく、家族間において平穏死の考え方は共有していきたいと感じました。看取る人、看取られる人、それぞれが後悔のない最期を迎えられるようできることはたくさんあります。リビングウィルの活用もとても効果的な方法の一つであると思います。私は証券会社に勤めており、遺言については言葉にする機会が多かったのですが、リビングウィルについては初めて知りました。死後への意思を伝えることも大事ですが、生前の意思を伝えることも同じように大事だと思います。

最後に、日本の患者の医療への知識の欠如についてです。

私たち全ての人間は死を迎える、すなわち全ての人間は患者の予備軍だと思います。この全ての人間が迎えるこの問題に対し、もっと医療への関心の持ち、知識を持つことがとても大事なのだと思いました。平穏死を迎えるためには、患者も努力が必要だと思います。全てが医者任せであれば、運に任せて死と共に生きることと変わらないような気がしました。国民皆保険制度がある、恵まれ過ぎと言えるこの国において、患者の知識不足は大きな問題だと思います。

先日TVを見ていた時に、日本の医療について討議がされておりました。その中の議題の一つに、日本国民の診療の頻度について話題になっておりました。日本人は何か事あるごとに病院に行き、少しのことでも医者に診てもらうということが習慣になっているとのことでした。（もちろん、五木寛之氏のように全然病院に行かない方もおられるのは事実ですが。）本当に診られるべき患者に時間を割くべきところを、そうでない患者も多数いることから、医者にかかる負担も多くなることは明らかです。

しかし、これだけ病院に行く日本国民にもかかわらず、医療否定本を読み、最良とは考えられない行動をとってしまいがちな実態は皮肉に思えます。患者もそれぞれ正しい知識を身につけ、信頼のできるかかりつけの医者と出会い、然るべきタイミングで然るべき診療を受けることが、患者にとっても、医者にとってもwin-winの関係となるのだろうと思います。

先生は、このような本を執筆され、メディアや講演会にも多く顔を出す影響力を持つお方だと思います。そして、医者でありながらも、一歩引いた客観的な目線で私たちに思いを伝えて下さることは、一市民として嬉しくもあり、心強くもあります。先生の想いが一人でも多くの国民に通じ、医療制度だけが充実している日本ではなく、医療との向き合い方も素晴らしい国となれば素敵なことだと思います。先生は、多くの国民にそのきっかけを与えることのできるお方だと思いました。本を読ませていただき、大変勉強になりました。陰ながら、応援しております。